

入中3年人権だよ

徳島市 八万中学校
3年生 第5号
2021年 4月30日
編集・埴 吉成正士

先日、人権学習の一環として、アニメ「芽吹き」を、学年全体で見ました。私も初めて見たのですが、古そうに見えて、内容は本当に考えさせられる内容でした。

— ストーリー —

境内で剣道の練習をしていた高校生の剛と倉田は、顔にあざがあるためにいじめられていた小学生の典子を手助けたことから、おばあちゃんと出会います。

おばあちゃんは二人に庭の隅にあるケヤキの切り株の事について話します。一人息子一志の結婚相手の芳枝を同和地区の人だからという理由だけで猛反対し、二人の仲を割いていきます。それがもとで眠れなくなった息子は、夜、ふらふらと外に出てトラックにひきずられ、ケヤキの木に頭をぶつけ亡くなります。幸せだった家庭はこれを境に音を立てるように壊れていき、夫は半狂乱になってその木を切り倒し、一家はその土地を逃げるように去ります。

18年後、夫に先立たれたおばあちゃんは、屋敷の始末と芳枝への謝罪のために、再びこの地に戻りました。おりしも学校に行けず、一人ぽつんとあや取りしていた典子に会い、交流が始まります。

ある日、剛は同和地区の学習会におばあちゃんを誘いますが、そこで意外な真実を知ることになります…。

「芽吹き」を見たみなさんの感想をもとに、人権だよを書いてみました。読んでみてください。

私は「芽吹き」を見て、無知でいることは怖いことだなと思いました。差別についてすべてを知らず、一部の勝手な噂だけでその人がどんな人か決めつけるのはおかしいと思いました。差別について何も知らないことで、知らないうちに自分が人を傷つけてしまっているかもしれないということにも気づきました。差別をしてしまったからでは遅く、ずっと後悔して生きていかなければならぬのはしんどいだろうし、された方はもっとつらいんだと思います。生まれたときから死ぬまで誰もが持っているのが人権で、それを侵すことは絶対にしてはいけないのだと思いました。

典子ちゃんが言っていたように、「たとえ自分の人権が侵されても、その人の人権が侵されそうになったら助ける」という素晴らしさに気づかされました。これから私は、今日気づいたことを忘れず、誰もが人権を大切にされる世界になり、生まれた場所や自分のコンプレックスを隠さずに生きていける、良い世界にしたいです。

「己の欲せざるところ、人に施すことなかれ」

昔、中国の孔子という偉い人が、弟子に語ったとされる言葉です。

「自分がされて嫌なことは、人にしてはいけない」

今まで出会ってきた幾人もの地区出身の親御さんたちから聞いた言葉と重なります。この言葉に感銘し、共感し、「自分もそんな生き方がしたい」と思いました。

た。受けてきた身だからこそ分かる、人としての間違いや生き方。そんな言葉や精神を自分のなかに生かし、まっすぐに生きていきたいと思いました。

部落差別をテーマに学習をしていると、マイナスイメージばかりが印象に残ることがありますが、そうであってほしくないとも思います。そうではなく、そこに生きてきた人々の生き様から、人間としての考え方や生き方、その中に宿る崇高さを学びとることができれば、マイナスイメージではなく、プラスイメージとして残っていくのではないのでしょうか。差別をする人はマイナスイメージばかりに囚われた結果、自分自身を不自由にしています。生きづらくしています。間違いを間違いと認められず、人としての生き方さえ見失っていきます。もしその間違いを、「間違いだった」と認めることができたなら、どんなに楽に生きられるでしょう。

差別に挫けず、差別に抵抗し、差別に断固として闘い続けてきた人々の生き様から、私たちが学べることはたくさんあるはずだと同時に、そう生きてこれなかった、ダメな自分、弱い自分、あまい自分、醜い自分にも気づくのではないかと思います。そこにきちんと向き合いながら、それを明らかにしながら、新しい「自分づくり」ができていければと思います。学年みんなできていければと思います。

今日、「芽吹き」を見て、差別は本当にいけないことだと改めて思いました。そして、悪口、いじめ、ケンカはすべて差別につながっているということを知りました。同和地区に住んでいるだけで結婚が許されないということは、僕は自分が実際にされたら嫌だし、「何が違うの」と思います。僕たちと同じ人間だし、同じ地球に生まれてきているのに、なぜ差別をするのかとすごく思いました。

「芽吹き」のなかで、小さい女の子がすごくいじめられているところに助けが来て、いじめてた子は逃げていました。すごくひどいことを何回も何回もやられているのに、助けたお兄さんがいじめていた子たちを傷つけようとしたら、逆に女の子は守っていました。「私のためにその子たちを傷つけないで」という言葉に、僕はビックリしました。僕がお兄ちゃんの立場だと、絶対傷つけてしまうし、女の子の立場だと、私をいじめたんだから、やれと絶対に言うと思います。そして、いじめていた子たちも、最後は仲良くなれたというのは、すごく安心しました。

おばあちゃんが最後に言っていた通り、自分がいじめたり差別したら、必ず自分に返ってくるし、本当にどんだけ謝ってもたりないぐらいだと思います。だから、改めていじめや差別は本当にいけないと思いました。

SA

やられたらやり返したくなる気持ち、分かる気がし

ます。

もし、自分の大切な人が、家族が、我が子が、何かの事件や事故に巻き込まれ、命を落とすようなことがあれば、自分は相手を許すことができるか。それは許されることではないと分かっている、相手をどうにかしてしまいたいという衝動に駆られるような気がします。自分はどうなってもいいから、相手をどうにかしてしまいたい。

昔、小学校の人権読本に、「招かれなかったお誕生会」という教材がありました。これは作り話ではなく、実際にあったお話です。

「招かれなかったお誕生会」

孫は小学4年生 かわいい顔した女の子
仲良しA子ちゃんの誕生会
小さな胸にあれこれと 選んで買ったプレゼント
早く来てねと友の呼ぶ 電話の声を待ちました
夕日が山に沈んでも 電話の声はありません
孫はぼつりと言いました
きっと近所のお友達 おおぜい遊びに行ったので
おちゃわん足りずにAちゃんは
困って呼んでくれないかも
2,3日たった校庭で A子ちゃん家での誕生会
楽しかった友人に 聞かされた孫はA子ちゃんに
どうして呼んでくれないの 私はとっても待ったのよ
A子ちゃんとても悲しい顔をして
私は誰より千恵ちゃんを 呼びたく呼びたく思ったの
けれども私の母ちゃんは
呼んではならぬと言ったのよ
それで呼べずにごめんねと あやまる友のその顔を見つめた孫の心には どんな思いがあったでしょう
私は孫に言いました
お誕生会に招かれず さびしかっただろうねと
孫はあのねおばあちゃん
A子ちゃんとても優しいの 私の大事なお友達
A子ちゃん悪くはないのよ
お母さんが悪いのよ 大人ってみんな我がままよ
寂しく言った孫の瞳に 光る涙がありました
どんなするどい刃物より 私の胸を刺しました
江口いと「人の値うち」より

「何が違うんですか。同じ人間じゃないですか」

数年前、差別発言を繰り返す人を前に、言い放ったことがありました。その場面を私は忘れることができません。まだまだ悔しい現実があります。それでも、じっと奥歯を食いしばり、言いたいことも飲み込み、「我慢」という闘いをしてる人がいます。

「目には目を、歯には歯を」「やられたらやり返せ」という考えがあります。でもそうではなく、「やられてもやり返さない」「抵抗しないという闘い」、非暴力主義を、インドのマハトマ・ガンディーが実践し、インドを独立へと導きました。

やって、やられての繰り返しでは、負のスパイラルから抜け出すことはできません。たとえ恨みがあって

も、それを許せる、「寛容の心」をもつこと。相手に迫るだけではなく、どうすれば分かってもらえるのか。分かてもらえる努力とは何なのかを、自分に課すること。今、自分にできることは何なのかを考え、実践すること。私は今も、その途中です。

一方で、そうして迫ってくる相手を前に、「どうしてそんなに迫ってくるのか」と、相手の身になって想像することも大切です。今、私たちがみなさんに問うている人権学習も、そうです。自分のことに置き換え、しっかり想像力を働かせてみてください。

「芽吹き」を見て、部落差別についての物語で思ったことは、なぜ昔は血はケガレと言ひ、そのケガレと言われたものを扱う人たちが部落の人と言われていたのか分からない。(勉強不足で部落の人って言うのも嫌なのですが…)で、なぜそのような言い方で、どんだけの人が苦しんできたのか、私が想像している倍だと感じました。言っているだけじゃなく、そのような態度で軽蔑し、人々を苦しめてきてしまったと私たちは思うだけで、何かしらの行動には移せていません。授業中だけその人たちを哀れな言葉だけで助けたいと思っている。そのように思うだけでは差別は一生なくならないと思います。

この前の授業で、先生が言っていたように、「人に任せて自分は言わんでいい、が差別しているということ」に、本当にそう思いました。私も言いたいけど、怖くて言えない、時間だけが過ぎてゆき、結局は言えませんでした。その心を強く持ち、思うとか感じただけで済ませないようにしたいです。それで少しずつ差別がなくなったら嬉しいです。このことをみんなで話し合うことができたらしていきたいです。 NA

みなさんに、何かしらの「痛み」はありますか？その「痛み」を人に言うということについて、どう思いますか？

あまり抵抗なく「痛み」を言える人もいるかもしれませんが。でも多くの方が、言いづらさを感じるのではないかと思います。それは、「勇気」という言葉が軽々しく思えるくらいの「勇気」ではないかと思います。

私は、「見た目だけで」という作文を聞いて、先生から教えてもらったことなんですけど。「みため差別」、肌とか、顔とかよく見えてしまうところをもってしまうものなんですけど。

私も、実は生まれたときに腰にあざがあって、それを母が見た時に、お医者さんに、「これはどうやったら消せるんですか」とたくさん聞いたらしいんです。そしてお医者さんから、「そこまで言うのならレーザーで消してもいい」と言われたそうです。そんなに目立たないところなのに、お母さんは申し訳なさそうに言ってくれたので、私も悲しくなりました。私はそこにあざがあることは、この世界に生きている証拠だと思っていて。それを、よく見えるところにあざがある人に対して、「わっ、気持ち悪」とか言うのは、おかしいなって思いました。

「人権を語り合う中学生交流集会2020」より

昨年度の中学生集会での発言です。

(次号につづく)